
乙女は白百合の箱庭に

赤眼鏡の白チョーク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

乙女は白百合の箱庭に

【Nコード】

N8249X

【作者名】

赤眼鏡の白チヨーク

【あらすじ】

「美弥ー大好き」「ありがとう」「…誰かあの二人どうにかしろ」とある女子校の、のほほん日常。ほんのり百合。完全作者趣味。のんびり更新していきます。よければお読みいただけたらと思います。

いち。

「ね、ね、美弥」

「何？」

「見て〜我が校のアイドル、和葉さんと未羽さんだ」

「…」

「微笑ましいな〜麗しいな〜何話してるんだろう。ね、何話してると思うっ？」

「昼ご飯の話？」

「…や、うん。確かに弁当食べながら話してるけどさ…」

「智由、これさっきの授業をまとめといたノート」

「え！ありがとうー！さっきから何書いてるのかと思ってた」

「四時限目、智由寝てたから」

「えーよくわかったね。ハゲ…じゃなくて森元先生にもばれなかったのに」

「涎でてたよ」

「…やだ恥ずかしい。お嫁に行けない」

「じゃあうちにおいで」

「……………美弥大好き！私美弥のお嫁になるー！」

「はいはい」

「美弥可愛いなあ〜」

「智由が一番可愛い」

「…もう、照れるじゃないか！」

「誰かあれどうにかしてよ」

「毎度のことながらあれが普通なのかどうかと思う」

「ああ…また美弥親衛隊がざわついている」

「……女子校だよね」

に。

「美弥大変ー!!」

「智由、おはよう」

「あ、おはよう。じゃなくて!大変なの!」

「どうしたの」

「あのね、あのね。…私は見てしまったの」

「…」

「…」

「…」

「…何を、とか聞いて」

「何を」

「我が校のアイドル、和葉さんと未羽さんがね、中央ガーデンにい
らっしゃたの」

「うん」

「お二人で朝早くからどうしたのかと思ったんだけど」

「おはよう愛里。今日の花当番だけど、昼時間私行くから」

「…むう…美ー弥ー」

「聞いてるよ。お二人がどうしたの」

「和葉さんが未羽さんの頬を触っててね…ネズミなの!」

「ネズミ?…チューしてたってこと?」

「うん。いやー…びっくりしちゃった」

「そう」

「麗しかったな…憧れちゃうなあ」

「智由」

「ん?」

「ちゅっ」

「…」

「

…

「

えっ…えええええ！」

「先生来る前に英語の予習確認しよう」

「あ、う、うん。うん」

「智由、それ数学のノートだよ」

「…あれか。でこチューだから許されるのか」

「ここ教室なんだけどね」

「あれは美弥的な嫉妬なんじゃないか？」

「あの二人早くくつつけばいいのにね」

さん。

「美弥：私もうダメかも知れない」

「どうしたの」

「最近和葉さんと未羽さん観察日記してて、すっかり忘れてたけど
…もうすぐテストだよー！」

「正確には来週ね」

「美弥：どうしよう。赤点なんかとつたら美弥と同じ白鳳寺なんか
行けーなーいー」

「…頭振ったら髪乱れるよ」

「…直して」

「はいはい」

「あーあ…やだなあ」

「智由」

「ん？」

「智由には私がついてる」

「お？」

「赤点になんかさせないよ」

「おお！さすが美弥！」

「赤点とつたら二週間私のお菓子禁止ね」

「…え？」

「だからお茶会もなし」

「み、美弥！それじゃ私生きていけないよ！美弥のお菓子がないな
んて…っ！」

「じゃあ頑張ろう？」

「うん！」

「さあ、今回の範囲の苦手分野の確認からしようか」

「手玉にとるってこつこついうことを言っただね」

「笑顔の美弥って怖い…」

「美弥のお菓子おそるべし」

「智由が単純過ぎるだけだろ」

よん。

「トリックオアトリート！」

「はい」

「むぐっ…もぐもぐ…」

「…」

「…じゅくじゅ」

「…」

「トリックオアトリート！」

「はい」

「むぐっ…ちょ、美弥どんだけお菓子持ってきてるの？」

「智由がそういつてくると思ったから」

「むむむむ…悔しい…」

「あ、智由」

「なあに？」

「トリックオアトリート」

「…え？」

「お菓子をくれないと悪戯するよ」

「あ、え、ちょちょっと待った！」

「待ったなし」

「美弥の馬鹿ー！どこ触ってるのー！」

「あれどこまでいくと思う」

「…あーあ…暴れすぎてパンツ見えてるよ」

「教室のドアから見てる親衛隊こわ…」

「ここ女子校だよな」

「あれ、美弥親衛隊さんだ〜おはよう」

「智由様、おはようございます」

「様付けなんかしなくていいのに」

「いいえ、そういうわけにはいきません」

「あ、美弥ならハゲ…じゃなくて森元先生に呼ばれて職員室だけど」

「把握しております。今日は美弥様に用があるわけではございません

ん」

「そなの？」

「このような物で申し訳ないのですが、私が本日実習で作りました菓子を持参しました」

「いい匂い…凄い美味しそう！」

「もしよろしければ、頂いていただけないでしょうか」

「いいの？」

「はい」

「わー、マフィンだ！私の好物だよ！」

「把握しております」

「今日朝ごはん食べ忘れてお腹減ってたんだよね〜」

「把握しております」

「チョコとバナナどっちにしよう…悩むなあ…」

「どちらもどうぞ。美弥様用のも焼いてありますので」

「本当？私マフィンはチョコとバナナが好きなんだよねー」

「把握しております」

「……………っ！」

「落ち着いて…！わかるけど、つつこみたい気持ちはわかるけど！
何でそんな細かいことまで知ってるのって思うけど！つつこんだ瞬
間にあんたの人生終わっちゃうから！」
「あれが親衛隊の情報の力なのかな」
「何でも知ってるんだね…」

ろく。

「よし、ネタキターっ！これでコミケに間に合う…！」

「愛里、さっきの授業中何書いてたのー？」

「……………」

「え、何で隠しちゃうの？」

「やだなあ、智由。誰にでも見られたくないものはあるでしょ？」

「…まさかラブレターとか！」

「授業中に恋文書く馬鹿がいるか！」

「えー違うの？じゃあ…交換日記とか？」

「や、違います」

「んむむ…じゃあ…」

「智由」

「美弥。どしたの？」

「赤坂先生に提出する、こないだのアンケート用紙でてないよ」

「…わあ、忘れてた。ありがと、美弥！出してくる！」

「……………」

「……………」

「……………」

「…な、何？美弥」

「コミケ頑張ってる」

「…っ！」

「ただ学校で年齢指定者の百合を書くときは、気をつけた方がいいよ」

「よ」

「美弥何で知ってるの…！？」

「…ふっ」

「え、何そのすました笑いは何…」

「ちなみに智由のパンツはピンクって書いてたけど今日は水色だか

「ら」

「…直しておきます」

「革命！」

「ねえ、コミケって何？」

「知らないほうが良いことでもあるってことだ。よし、8流し！」
「…負けた」

ばんがいへん。く長谷川と滝と鈴橋く

「…あ」

「何？」

「あー、いや。ほら、うちのクラスで有名な蓮川さん」

「ああ本当だ」

「あの話って本当なのかね」

「蓮川さんと八嶋さんが付き合ってるってやつ？」

「そうそう。珍しいことじゃないけどね」

「結構多いもんね」

「八嶋さんは親衛隊まであるし」

「おっはよー！」

「おはよ」

「何見てたの？…お、智由たん美弥たんじゃんか」

「あの二人って付き合ってるのかなーって話」

「付き合っていないよ」

「えっそうなの？」

「うん。智由たん鈍すぎて美弥たんからの愛に気づいてないと思う」

「詳しいね…」

「あ、付き合っただけ出した」

「何？」

「私恋人できた」

「…えー！？」

「この学校の子なんだけど」

「い、いつの間に！」

「嘘お！？」

「近々紹介するわ。じゃねー」

「え、まっ…待ってー！」

「……本当に?」

なな。

- 「で、何でそんな話になったの」
「だって智由と美弥お似合いだもん」
「いける、いけるよ！」
「美弥智由か…新ネタ…」
「愛里、後で絞める」
「ご勘弁くださいいいい」
「いやいや、美弥はいいとしても私は無理無理」
「本人はそういつてるけど？」
「……和葉さんと未羽さんに話したら楽しみにしてるっていったけど」
「頑張りましょう！ね、美弥！」
「おお、単純」
「この組み合わせなら学祭優勝も夢じゃないね…！」
「目指せ学食無料券！」
「学食無料券目当てか」
「智由もああ言ってるし、美弥やるっしょ？」
「…まあ」
「………学祭ネタ」
「………愛里？」
「う、嘘ですううううう！」
「で、何やるの？」
「聞いてなかったの？」
「学祭のクラスの出し物」
「劇だよ」
「なんと、ロミオとジュリエット…！」

『...10...』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8249x/>

乙女は白百合の箱庭に

2011年11月5日02時02分発行